

年に一度の祭礼では、「関東一の水祭り」として、夏の夜に涼感を与えています。



玉淀水天宮



荒川に浮かぶ舟山車（寄居玉淀水天宮祭）



荒川河岸（左岸）斜面の水神様（石宮）

玉淀水天宮のいわれと礼祭

玉淀水天宮は、寄居町寄居の荒川左岸の河岸に隣接して建立されています。そのいわれは、1931（昭和6）年にこの地が「玉淀」（県指定名勝）と命名された後、神社の設置の話がもちだされ、探したところ川に面したところに石の宮があるのが発見されました。これは俗にいう水神様とってこの地方の漁師たちがお祭りして、水難除けの神様として信仰していることがわかり、当時の玉淀保勝会が直ちにこの水神の神体を基として水天宮を祀りました。

現在では、安産・水難除けの神様として、8月第1土曜日に祭礼を盛大に行っています。

祭事のあと「つけまつり」として、町内別の供奉船が花やボンボリちょうちん等で飾りたて、笛、太鼓等ではやしなから玉淀を遊覧し、鉢形城趾から花火が打ち上げられ、川面を美しく彩ります。

昭和初期に始まり、関東一の水祭りとして、夏の夜に涼感を与えています。

▶ 玉淀という地名の由来

秩父山地から関東平野に流れ出る荒川が作り出した特徴的な地形で、奇岩・絶景の景勝地として1935（昭和10）年に県指定の名勝となりました。現在は、荒川の水位が変動したことからその姿を大きく変えています。その名は、水がゆるやかに流れる様子を玉の色に見立て、「玉のように美しい水の淀み」だということから命名されたということです。その美しさに魅かれて、古くから多くの文化人がこの地を訪れています。特に、明治の文豪田山花袋は、紀行文「秩父の山裾」の中で、東京付近においてこれほど雄大な眺めを持つ峡谷はないと激賞しています。荒川の清流に沿った道路に桜並木があり、桜の名所にもなっています。また、季節により、鮎などの釣り場としても大変人気があります。



玉淀河原

コ ラ ム 寄居玉淀水天宮祭とは

1931（昭和6）年、玉淀を開発した保勝会の有志が、玉淀の景勝に加え神社を勧請して祭事を行うことを発願し、幸い下流樋の下の河辺山林にあった石宮を発見しました。調べたところ、この地方の漁師が水難よけに祭った水神様であることを知り、改めて水神様と水天宮様を合祀して、おまつりしたもので、玉淀保勝会（寄居町観光協会の前身）では、水天宮祭祭典の付け祭りとして、1931年8月5日に第1回「玉淀水天宮祭花火大会」を開催して、たいへんな人気を集めました。

以降、各町内からボンボリ、提灯で美しく飾りたてた舟山車が数隻参加し、城山をバックに打ち上げられる大花火と川面に映える万灯の競演は、「関東一の水祭り」と呼ばれています。



寄居玉淀水天宮祭の会場となる玉淀河原

アクセス

玉淀水天宮

交通：東武東上線「玉淀駅」下車、徒歩約5分

住所：埼玉県大里郡寄居町寄居



玉淀水天宮

